

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第916号 平成27年4月17日

## 吉里吉里忌

4月19日は、作家の井上ひさしさんが亡くなった日で、この日には井上氏を偲び、ゆかりの深い人達が「吉里吉里忌<sup>きりきりき</sup>」を開催して来ました。

「吉里吉里忌」というのは、井上氏の有名な作品「吉里吉里人」から取ったもので、彼が亡くなって5年経った今年は、井上氏の故郷、山形県川西町で一般の方も参加して「吉里吉里忌」が開催されることになっています。

井上氏は、1934年（昭和9年）山形県に生まれ、上智大学を卒業後、小説家、劇作家、放送作家として活躍し、2010年4月に75歳で亡くなっています。

『ひょっこりひょうたん島』『忍者ハットリくん』は知らない人はいないと思います。

社団法人日本ペンクラブ会長（第14代）を務められ、2004年には文化功労者として顕彰されています。

遅筆といわれている井上氏ですが作品は膨大で、彼の作品は我が家にも何冊かは在るものの、とても私では論評できる存在ではありません。ただ、彼の妻ユリさんが、2月10日付の朝日新聞に井上氏について語っているように「人間に果てしなく興味を持ち続けた人」であるというのは、彼の作品を通して私にも理解出来ます。

また、井上氏の日本語に対する造詣の深さは他を圧倒するものがあり、彼が亡くなった後に出版された「日本語教室」は、私にとって座右の書であると共に、彼が遺した数ある名言の中でも、

「むずかしいことをやさしく、  
やさしいことをふかく、  
ふかいことをおもしろく」

というのは、私が原稿を書いたり、人にものを伝えようとする時の指針となっています。

ところで、「吉里吉里忌」の基となっている「吉里吉里人」という小説は、1973年から78年にかけて書かれた作品で、東北地方の一寒村が日本政府に愛想を尽



かして突如「吉里吉里国」を名乗り、独立を宣言するところからこの物語は始まります。

「吉里吉里国」の独立を阻止しようとする日本政府の妨害に対して、「吉里吉里国」の方は「吉里吉里語」つまり「ズーズー弁」を国語にし、食料やエネルギーは完全な自給自足により盤石です。更に、不老長寿の妙薬等輸出品も沢山ある他、臓器移植を含めた高度医療や独自の金本位制等を世界中にアピールして、したたかに対抗し続けるというもので、実に荒唐無稽といえれば荒唐無稽な作品ではありますが、真面目に言えば、国というものをどう考えるかを問い掛ける実験的な作品といえます。

この作品は、40年程前に書かれた作品ですが、今でも新鮮な感じがします。

私が道庁で企画振興部長として、国と道州制の問題でやり合っていた時、この作品が頭をよぎりました。

道州制というのは、地方分権を進め、地方の事は地方が自ら考え、行動出来るような仕組みにして行こうというもので、外交や防衛等国の根幹に関わる仕事は国が担当し、地方が出来る仕事は地方に任せるべしという、実にシンプルな主張でしたが、国の抵抗は凄まじく、「まずは国があっての地方という」発想から一步も抜け切れない官僚達の、意思の強さ、私からすると頑迷さに、こんな事ならいっその事、北海道も独立した方が良いのではと思ったりもしたものです。

とはいえ、ドサンコの方だって、吉里吉里人程にしたたかでも、覚悟もないではないかと思ひ至り、苦笑いした事を覚えています。

(塾頭：吉田 洋一)